25th 新響

新交響楽団

第25回定期演奏会



THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA
25th Subscription Concert

新交響楽団第25回定期演奏会

1973年3月24日㊏午後6時半・3月25日㊐午後7時
東京文化会館大ホール・神奈川県立音楽堂

指揮	芥川也寸志	
Conductor	Yasushi	Akutagawa
ヴァイオリン独奏	徳永二男	
Violin Solo	Tsugio	Tokunaga

チャイコフスキーの夕べ
TSCHAIKOWSKY ABEND

I イタリア奇想曲 作品45
Cappriccio italien op. 45

II ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35
Violin Concerto D major op. 35

第1楽章 アレグロ・モデラート
1st Mov. Allegro moderato

第2楽章 カンツォネッタ アンダンテ
2nd Mov. Canzonetta Andante

第3楽章 フィナーレ アレグロ・ヴィヴァーツィシモ
3rd Mov. Finale Allegro vivacissimo

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

III 交響曲第6番 ロ短調「悲愴」作品74
Symphony No. 6 "Pathétique" B minor op. 74

第1楽章 アダージョ——アレグロ・ノン・トロッポ
1st Mov. Adagio——Allegro non troppo

第2楽章 アレグロ・コン・グラチア
2nd Mov. Allegro con grazia

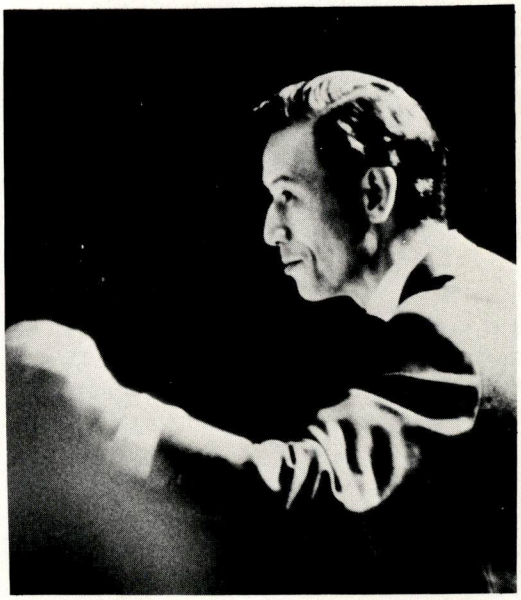
第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ
3rd Mov. Allegro molto vivace

第4楽章 アダージョ・ラメントーソ
4th Mov. Adagio lamentoso

——音楽監督・常任指揮者——

芥川也寸志

Yasushi Akutagawa



１９２５年　東京生れ。
１９４９年　東京音楽学校研究科作曲部を卒業。
作品——交響三章、トリプティク、交響曲第一番、エローラ交響曲、オスティナート・シンフォニコ、チェロ協奏曲、オーケストラのためのラプソディ。
１９５６年新響発足以来の常任指揮者であり、１９６９年音楽監督就任。昨年秋の内部改革によって理想のアマチュアオーケストラ創りに一歩を踏み出した。
　プログラム末尾の維持会員制度も氏の発案によるもので、技術面、運営面での指導力は団員の大きな信頼を得ている。

——ヴァイオリン独奏——

徳永二男

Tsugio Tokunaga



1946年11月　神奈川県横須賀市生れ。
　5歳から鷲見三郎氏に師事。
1958年　毎日学生コンクール小学生の部、全国一位。
1962年　桐朋学園特別高等科入学。
1965年　毎日新聞社、NHK主催音楽コンクール入賞。
1966年　東京交響楽団にコンサートマスターとして入団。
1968年　文化庁海外派遣音楽研修生として西ドイツへ一年間留学。
　ベルリンフィルハーモニー交響楽団コンサートマスター、M・シュヴァリベに師事。
1972年３月　虎の門ホールでデビューリサイタル。10月ヴァンクーバーシンフォニー（指揮・秋山和慶）と協演。ハチャトリアンの協奏曲を演奏。
　現在東京交響楽団コンサートマスターをつとめるかたわら室内楽、協奏曲等に活躍している。
　新響との共演は71年４月以来２年ぶり、３度目である。

曲目解説

イタリア綺想曲

法学士から志をたて大作曲家になったチャイコフスキーの作品は多くが親しみ易いものであるが、この〝イタリヤ綺想曲〟は演奏曲用の手ごろな長さの管弦楽曲として特に人気の高い作品である。

チャイコフスキーは彼が崇拝していたモーツァルトと同様、イタリアに遊学したことがあったが、彼が当地で耳にしたメロディーやリズムの幾つかが組合され、イタリア滞在の間にこの曲のピアノのスケッチが書上げられた。

イタリアはアルプスを挟んですぐ北側にあるドイツやオーストリアの人達にとっても、たわわにオレンジの実る〝陽光の国〟として憧れの地だそうだが、（欧州人のイタリアへの憧れはトーマの〝ミニヨン〟の中のアリア「君よ知るや南の国」にいみじくも唱われているが）ことさら気候の峻厳なロシアに生れ育ったチャイコフスキーにとって、イタリアの太陽に触れることは永い間の夢であった事は想像に難くない。

イタリア滞在からチャイコフスキーが音楽的な感化を受けたかどうかは別として、この地の風土や民謡や美術（ミケランジェロやラファエロ等の）がふさぎ易いチャイコフスキーの気分を大いに慰わせたことは間違いない。この旅行の少し後に書かれた曲には〝子供のためのピアノ曲集〟や〝白鳥の湖〟の中にもイタリアの民謡をそのままとり入れた小曲が見い出せる。

〝イタリア綺想曲〟はチャイコフスキーがローマの宿舎の窓から聴いた衛兵のラッパをとり入れたというファンファーレに始まり、幾つかの民謡色濃いメロディーやリズムがバレーの舞台の様々な衣裳の踊り子達のように入れ替り登場する。　それらは3連音のリズムと和弦をバックにした哀調を帯びた旋律、オーボエのデュエットによる陽気なメロディー、南国的リズムに乗った目まぐるしい音型等であり、最後にはタランテルラのリズムによると思われる6／8拍子の音楽となり、次第に興奮を増し華やかな強奏で結ばれる。

イタリアに遊学した作曲家といえば、外にメンデルスゾーンやベルリオーズがそうであり、彼らも当地のリズム（タランテラとそっくりのサルタレロ等）をとり入れて作品を書いたが（〝イタリア交響曲〟や〝ローマの謝肉祭〟）彼らの作品が明快でいかにもイタリア的気分をもたらすのに対し、チャイコフスキーのこの曲は、全体に厚いオーケストレーションで暗い気分も入り混っている。確かに材料はイタリアから持帰ったスパゲッティーやマカロニかも知れないが、味つけはロシア風にこってりとしている。〝イタリア綺想曲〟も決して悪くない題だが、曲想に一層ふさわしい題名は〝イタリア風ロシアの復活祭〟……。

ヴァイオリン協奏曲　ニ長調

チャイコフスキーはイタリアから帰って間もなく、ラロの〝スペイン交響曲〟に刺激を受けてヴァイオリン協奏曲を書上げ、当時ロシアを代表するヴァイオリンの大家であったアウワーに演奏してもらうべくこれを献呈しようとしたが〝演奏困難〟を理由として事実上の演奏拒否に会ったことはよく知られている。この曲より前に書かれた〝ピアノ協奏曲第一番〟が始め A. ルービンシュタインに献げられ同じ形の拒否に会っているのでチャイコフスキーにとっては2度目の苦い経験である。

確かにその頃までのピアノ協奏曲は独奏部が比較的簡潔な分散和音とスケールを中心にして作られることが多かったから、チャイコフスキーの協奏曲のひねくれた独奏部の扱いが当時のピアニストの指や耳に染まなかったことは或る程度理解できることである。しかし、このヴァイオリン協奏曲の場合、独奏部の用い方は機能的に全く申し分ないものであることを考えると、アウワーの非難は（彼自身の助言を得ずに書かれた協奏曲に対する）大家の我ままな当てつけと見られても仕方がない。

チャイコフスキーはどちらかといえば楽器の機能におもねるよりも自分の楽想に忠実だった方なので、オーケストラ曲において特にヴァイオリンのパートは弾きにくいと言われるが、この協奏曲における独奏部の扱いは自らヴァイオリンを弾かず、とりたててヴァイオリン曲を多く書かなかった作曲家の作品とは思えない程である。実際には、独奏パートを書く際にはコテックという友人のヴァイオリニストの助力があったと思われるが、曲の内容に対する助言よりも主として草稿の試奏をしてもらったようである。

初演は結局、当時ライプチヒの音学院の教授をしていたブロッキーというヴァイオリニストによりウィーンフィルハーモニーの演奏会で初演されたが、内容的な面からも「極めて泥臭い」という酷評をこうむった。しかし、ブロッキーは初演の不評にもめげずヨーロッパ各地での曲を演奏して廻ったので、曲の価値は次第に認められるようになった。

この協奏曲の特色は全編が親しみ易いメロディーや快いリズムで通されている事であり、また独奏ヴァイオリンから他の協奏曲に見られない甘美な音色が引出されている事だろう。中でもG線（最低弦）の唱わせ方は特別優れている。オーケストラは独奏部の音色を引立たせていると共にテュッティの部分にも魅力あるパッセージが含まれている。

始めは演奏を拒んだアウワーも後にはこの曲の良さを認め、作曲者に謝罪して自らもしばしば演奏会で弾くようになった。彼は自分の弟子達ージンバリスト、エルマ

ン、ハイフェッツ等にもしきりとこの曲を弾かせたが、彼等の演奏なら我々も録音により聴くことが出来る。

第1楽章　アレグロ・モデラート（4/4拍子）
第2楽章　カンツォネッターアンダンテ（3/4拍子）
第3楽章　アレグロ・ヴィヴァチッシモ（2/4拍子）

交響曲第6番「悲愴」

〝悲愴交響曲〟はチャイコフスキーの死の直前に書上げられた最高傑作だが、この曲は彼の他の管弦楽作品に見られない内向的・瞑想的・諦観的な性格から、彼の作品中でも極めて特異なものだと云える。

チャイコフスキーの作品は交響曲から歌曲・室内楽曲に至るまで広い範囲に及んでいるが、彼の真価は何といってもバレー音楽・交響曲等の管弦楽曲に示されているだろう。他の作風はロシア音楽の中では〝五人組〟に代表される民族色に比べれば洗練され西欧的だとされているが、あくまでロシア的であるという意味から彼らと大同小異であるとも云える。民族による作風の相異は極めて明瞭であり、ドイツ音楽はまさしく構成的、フランス音楽は感覚的、イタリア音楽も感覚的だがより明晰であり、ロシア音楽は原色的な色彩味を帯び特にリズム感に秀でている。現代日本の音楽は和旋法の影響かどうか、構成的であるよりは、より感覚的であるだろう。

チャイコフスキーの作品には構成的な面からは顕著に単純さが認められる。即ち彼の作品は一概に、作品を構成している音の要素を（旋律、リズム、装飾的役割という風に）即座により分けることが出来る。この様な作風そのものは明らかに深遠な作品を作り上げることに不向きだが、この欠点を補っているのがそれ以外の要素－旋律や音色の美しさ、音響という広い意味での新しい和声独特の立体感を斉らす音の合成、優れたリズム感等々であろう。

チャイコフスキーが紛れもなく大作曲家である事は、〝胡桃割人形〟〝白鳥の湖〟等を構成している極めて多数の小曲の一つ一つが互いに趣向の異った面白さで書かれている事からも察せられる。単に後世に名を残すためだけなら幾つかの（場合によっては唯一つの）優れた作品を残せば充分であるが、大作曲家と呼ばれるためには作品のあらゆる部分に天才の片鱗を示す必要があるだろう。例えば、プッチーニとヴェルディのオペラを比較すると、プッチーニの作品はさわりの部分ではヴェルディの作品に劣らないが、さわり以外の部分には大きな開きが感じられる。しかしそれでも彼の名は充分後世に残っている。

チャイコフスキーの作品が一様にもっている〝楽しさ〟は間違いなく彼の作品の個性だが、チャイコフスキー自身の個性ではなかった。（或る心理学者によると天才は躁うつ症型、分裂症型、てんかん質型等に分れるそうだが）チャイコフスキー自身は顕著なうつ病癖に悩ませられていた。彼に限らず、過去の大作曲家達のほとんどが、多くは芸術そのものではなく世俗の事柄から、一通りでない苦しみを味わいながら生きていた事を我々は知っているが、しかし人生に於ける労苦が他人に対する哀悼や鎮魂という形以外では、直接作品に表現された例はこれまでほとんど無かったろう。

〝悲愴交響曲〟は作曲者の精神的苦悩が或いは音に表わされたかも知れない点で特異だが、一口に言えることはその内面的な性格である。チャイコフスキーはその作曲生活において旧来の音楽にとらわれない新しい音楽を求めなかったことは無かったが、一方で自分の音楽が聴衆を戸惑わせたり退屈させたりする事を大いに恐れていたことも確かだろう。その結果（というよりこれがチャイコフスキーの音楽そのものだが）構成は単純だが充分我々の官能に訴える部分部分の連続によって出来上った理解し易い曲が作られていった。もちろん交響曲の場合は（特に主題の展開という要素から）他の作品よりもより緻密で構成的な内容をもたされたが、第4番や第5番の交響曲では全曲に一つの主題を通わせ、よりドラマティックな興奮を盛上げようというより外面的な（つまり聴衆を意識した）性格が露見している。

〝悲愴交響曲〟が内面的であると判断されるのは、この作品が一貫して瞑想的気分に満ちており、華美な表現や作為的な曲の盛上りなどが見られないからだが、これはひとえに作曲者の意識が聴衆に対してというより作曲者自身の感動に向けられていたためと考えられるだろう。チャイコフスキー自身「この作品には叙述的内容が盛込まれているが、それは誰にとっても謎であるべきだ」と語っているが、憶測が許されるなら、ここに盛込まれたものは決して卑近でない事柄－過ぎ去った過去の苦悩、人間の死や来世といった観念的な事柄だったろう。

この作品が全体的に陰うつな調子で書かれているにもかかわらず聴衆に大きな感銘を与えるのは、これに表わされたものが苦悩であったとしても、それが作曲者の内部で或る種の感動へと昇華されていなかった筈がない。我々の苦しみはそれが大きければ大きい程、それが悟りや諦観の域に達した時、気持の安らぎや一種の感動へと変化して行くものであるが、こうした感動は人生の最終段階へ至った場合に於いてはことさら大きいものであろう。

〝悲愴交響曲〟の完成にはチャイコフスキーは尋常でない意欲を燃やしていた。構想の段階で「私は自分の創作

曲目解説

の最後を飾るような交響曲を作りたい欲望にかられている」と手紙に書いたし、後には「私はいま新曲の作曲に没頭しているが、これは私の最上の作品となるだろう」と述べ、また「私は旅行中にこれを頭の中で作曲しながら幾度となく泣いた」とも述べた。作曲の筆は概して順調に進んだが、曲が完成を見たのは構想が浮んでから約4年を経た1893年である。

この交響曲の完成から死に至る迄の間、チャイコフスキーの心はかって無く満たされていたようである。この曲の初演のため自宅からペテルスブルグ（レニングラード）へ向かう途中、友人の葬儀に列席したが、この後も「今ほど健康で幸福な気分を感じたことは無かった」と語っていた。初演は完成の年の秋チャイコフスキー自らの指揮で行われ、楽員や聴衆の反応は期待した程のものではなかったが、彼はいつもの様には落胆しなかった。

初演の4日後に友人達と昼食を供にした際、折しもコレラの流行中であるにもかかわらず、平気でなま水を飲みその夜観劇を終えた後でも「私が死ぬのはずっと先だろうね。長生きしそうだ。」と友人に語った。しかし、彼は翌日からコレラで床に臥し数日後に他界することになった。

彼の急逝は〝悲愴交響曲〟の完成に劇的な要素を加えたし、これは或いは交通事故のような不運であったのかもしれないが、少くとも一代の情熱を傾けた大作を書終ったこの時のチャイコフスキーにとって死は既に恐れるものではなかったろう。確かにストラヴィンスキーの様に、青年時代に全生涯に栄光をもたらすような作品を書上げた作品家も幸福だが、死の直前に自己の芸術の頂点を究めたチャイコフスキーもまた幸福な作曲家であったと云える。

第1楽章（アダージョーアレグロ・ノン・トロッポ）

低音部による沈うつな序奏が終ると2部に分れたヴィオラにより、第一主題が奏される。これは序奏の中の主旋律（楽譜1）の変型である。16分音符の音型を中心として気分に次第に緊迫するが、これが和らぐと名高い第2主題が弱音器をつけた弦に奏される(楽譜2)。しばしの夢見ごこちは展開部の最強奏に破られるが、これは交響曲の常識としては余りに刺激的すぎ、これからもこの曲の叙述的性格が予測される。第一楽章は何度か押よせる悲嘆な気分の高まりによって出来上っているが、それだけに安らいだ部分は格別の美しさに感じられる。



第2楽章（アレグロ・コン・グラツィア）

チェロによって唱い出される歌謡風の楽章。特徴ある5拍子によって書かれているが（楽譜3）聴き手にはむしろ3拍子かと思われるような自然な感じしか与えない。作曲者は〝喜こばしく〟と表現しているが、一種の悟りのような沈着な気分が背後に流れている。



第3楽章（アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ）

スケルッツォを擬したと思われる3連符の音型と行進曲風のモチーフ（楽譜4）がこの楽章の中心だが、この両者とそれから派生した音型の錯綜はとり分け緻密に書かれている。両者のうち行進曲風モチーフは執拗に最後までこの楽章を支配し、高らかに盛上った楽章の結びは恰かも曲の大団円を思わせる。



第4楽章（アダージョ・ラメントーソ）

交響曲の終楽章として例の無かった重苦しい緩徐楽章となっており、これはこの曲の最大の特徴である。冒頭の旋律は何らかの効果を得るために、2つのヴァイオリンから交互に音を得ている（楽譜5，6）。陰うつな 気分の高まりと鎮まりがくり返される点は一楽章と同じだが、この楽章は苦悩との葛とうよりも諦観と瞑想の気分が強く支配している。この中で長調の旋律（楽譜7）は来世への憧がれのような安息をもたらす。中間の高揚を過ぎた後は次第に意気を失ってゆき、曲の冒頭に呼応した消え入るような幕切れに至る。



（Vla　菱沼佳史）



新交響楽団

新交響楽団、新響は名前こそN響の前身と同じですが純然たるアマチュアのオーケストラで、名簿に見るように、サラリーマン、学生、主婦など、音楽を職業としない120名の団員から構成されています。

週1回土曜日、東京文化会館地下のリサーサル室での練習を基礎として、月々 500円の団費と、演奏会の収入による独立採算で運営されています。

昭和31年創立以来の常任指揮者芥川也寸志氏の献身的指導によって、現在日本で望み得る最高レベルのアマチュアオーケストラとされており、42年秋の訪ソ旅行、44年秋の沖縄九州旅行という華やかな活動がある反面、週1回2時間半の練習、実質的には何の拘束もない任意団体であるという絶対的な制約をうけているため、累積赤字をかかえて常に解散の危機に瀕しているといっても過言ではないでしょう。

新響を存続させるものは、一緒にアンサンブルを創るという一点にしかありません。2～3回の練習で演奏会をもつというプロのオーケストラにはできないような、すみずみまで奏きこんだ演奏をモットーとし、毎週の練習自体をも一つの目的とする緊張と充実が団員の共通の目標となっています。

新響のもう一つの目的は、オーケストラを団員の自己満足としてでなく、できるだけ沢山の人に聴いてもらいたいという演奏団体としての活動です。一昨年から新たに若手指揮者のホープ小林研一郎氏を指揮者として正式にお迎えし、芥川先生とタクトを分担して頂くことにより、外部からの依頼にも応じられる演奏団体としての体制をととのえつつあります。

最近の主な演奏会

1972年

2月7日　新響新春特別演奏会　日比谷公会堂
パッサカリアとフーガ、Vn協奏曲＝メンデルスゾーン（独奏：黒沼ゆり子）　交響曲第1番「巨人」マーラー

4月2日　第23回定期演奏会　東京文化会館
交響曲第36番「リンツ」＝モーツァルト、ピアノ協奏曲第4番＝ベートーベン（独奏：遠藤郁子）、幻想交響曲＝ベルリオーズ　　指揮：小林研一郎

6月6日　合唱団〝鯨〟演奏会に出演　日比谷公会堂
《ブルックナーの夕べ》ミサ曲第3番（大ミサ）、デ・デウム　指揮：小林研一郎

8月23日　東響・新響合同サマーコンサート　東京文化会館
はげ山の一夜＝ムソルグスキー・スラブ行進曲＝チャイコフスキー（以上指揮：小林研一郎）、組曲「展覧会の絵」＝ムソルグスキー・ラヴェル（指揮：秋山和慶）

11月12日　第24回定期演奏会　日比谷公会堂
ファウストの劫罰Op. 24より＝ベルリオーズ、2台のピアノのための協奏曲＝モーツァルト（独奏：池場文美、中井正子）交響曲第7番　イ長調＝ベートーベン

11月23日　FM東京「おはようコンサート」のための録音　東京スタジオセンター

12月17日・19日　第九特別演奏会　日比谷公会堂
トッカータとフーガニ短調＝バッハ・ストコフスキー　交響曲第9番「合唱付」＝ベートーベン独唱：常森寿子、志村年子、金谷良三、原田茂生（指揮：小林研一郎）

（指揮は特記以外　芥川也寸志）

新響サマーコンサート

日　時　8月18日(土)　午後7時
会　場　東京文化会館大ホール
曲　目　パリのアメリカ人……ガーシウイン
ペーターと狼……プロコフィエフ
交響第6番　ヘ長調「田園」……ベートーベン
指　揮　小林研一郎　芥川也寸志　　**入場料**　未定

新響・団員募集中！

入団希望者に対しては原則として、月の最終日曜日の午後、オーディションを行い、新響のレベル、パート人員の必要度、本人の環境、入団意志などを考慮して決定します。
オーディションでは、課題曲(下記)、自由曲、初見のアンサンブル曲を演奏していただきます。

〔課題曲〕

Vn	モーツァルト	協奏曲第5	第1楽章
Vla	エレッレス	ソナタ	第2楽章
Vc	ヴィヴァルディ	ソナタ第5	第2楽章
Cb	カプッツイ	協奏曲	第1楽章
Fl	モーツァルト	協奏曲ニ長	第1楽章
Ob	ヘンデル	ソナタ第1	第1楽章
Cl	ウェーバー	小協奏曲	第1楽章
Fg	モーツァルト	協奏曲	第1楽章
Hr	モーツァルト	協奏曲第3	第1楽章
Tp	ハイドン	協奏曲	第2楽章
Tb	R.コルサコフ	協奏曲第1, 2	楽章
Tub	ワーグナー	マックタージンガー	

(楽譜のない方はコピーをお貸します)

〔オーディション日程〕
4月29日(日)　午前11時
5月27日(日)　午前11時
6月24日(日)　午後1時

〔問合せ先〕
① 団員をご存知の方は団員を通して。
② それ以外の方は人事担当の橋谷幸男まで。
自宅332-4075, 会社563-4451内292(キグナス石油 営業計画課)

〔申込先・オーディション場所〕
〒160 新宿区須賀町14大湊ビル　**新交響団** TEL 357-5255
国電信濃町と地下鉄四谷三丁目の丁度中間、どちらからも徒歩3分、2つ目の信号、八百屋、CPA学院のビル4F

新響維持会員募集中!!

音楽を愛する大勢の方々の支持のもとに演奏活動が行なわれることがこれからのオーケストラ活動のあり方と信じ、維持会員制度を発足させました。◇年額1口(1200円)以上、◇今後1年間ご案内をさしあげる演奏会に自由にご入場になれます。◇定期演奏会プログラムにご芳名を掲載します。◇ご来場の方にはプログラム贈呈。◇その他新響の全ての演奏会入場券が優先的に割引で購入できます。◇住所・氏名・年令・職業明記の上現金書留で下記迄。(維持会員申込と付記)

新響登録会員募集中!!

◇入会金はいりません。
◇演奏会の案内を毎回お送りします。
◇入場券は1割引といたします。
◇プログラムを無料でさしあげます。
◇申込はハガキにて、住所(TEL)、氏名、年令、職業明記の上下記事務所まで。

「オーケストラの名曲800選」リスト頒賦中

音楽鑑賞、レコード集収の手引に、古今の無数の管弦楽曲の中から800曲を選び、索引、演奏時間を付記。申込は左記事務所迄。140円(20円切手可)

〒160 新宿区須賀町14　大湊ビル
新交響楽団　357−5255
郵便振替口座　東京177,071